



時点描

三次空地

Waltz of twilight

車の助手席から青いエナメルの靴が駆け出した。長い髪と白いスカートをなびかせて、妖精が秋風と踊ってる。

開けっ放しのドアを閉めてから、僕は黄色いカーディガンの背中を追う。ゆっくりと。公園に続く並木道。遊歩道にできた小さな水溜りが澄んだ空を映し出していた。辺りにはまだ雨の匂いが残っている。肌にまとわりつく空気はじつとりと重い。

僕たちのほかに人影はなかった。黄色く色づいた銀杏の葉が揺れる、乾いた音が僕の傍を通り過ぎていく。彼女が上機嫌で口ずさむメロディーが遠く響いた。

枯葉を踏みしめる感触が、心の奥底に仕舞い込んだ記憶を呼び覚ましていく。みぞおちの辺りが締め付けられてるのは、空気が冷たいからだけじゃない。

半分だけ空っぽになった部屋のテーブルに、贈ったばかりの指輪がポツンと取り残されてた。疲れた身体を引きずって、似たような場所をとぼとぼ歩いてた。よれたスーツのまま。僕はあの子の背負ってた悲しみに耐えられなかった。涙を見せたら、わざとだ、って怒ってたっけ。最後まで何にもわからなかったけど、それでも好きだった。不器用に。

ふと我に帰ると、彼女の姿が見えない。彼女の名前が高い空に吸い込まれる。

「ここだよ」

振り向くと彼女が木に持たれかかって手を振ってた。小走りでこっちにくる。僕はポケットに仕舞ってた右手を出して、彼女の左手を取った。

「どうしたの？」

彼女、驚いた顔して僕を見てた。いつもはこんなことしないから。

何もいわないで首を振る。風に消えたような気がしたんだ、そんなこといったら笑われるだろうから。

でも彼女には僕の心の中なんてすっかりお見通しなんだろう。どこにもいかないよ、といたげに僕の手をぎゅっと握り締めた。頼りない僕の腕に身体を預けてくれる。まるで恋人みたいな構図。

木とロープで出来たアスレチックが見えてきた。赤色の馬も、水色の象も、みんな湿った色をしている。僕らの足音を聞いた雀が飛び立った。烏が上空で濁った声を上げてる。地上には僕と彼女だけ。

置き去りにされた三輪車が立ち尽くしてる。砂場にはプラスチックの赤い熊手が突き刺さったままだ。昼間の雨はきつく、急だった。

彼女が不意に僕の手を離して、ブランコに向かって走り出す。立って漕ぎだした。不安定なヒールで器用にバランスを取りながら。錆び付いた鎖が軋んで啼いた。

住宅街の谷間に蕩けていく太陽、もう少しだけそこに踏みとどまっていたほしい。夜になれば僕らは離れ離れになってしまうから。

僕は三輪車に腰掛けて、風に揺れるブランコを眺めてた。彼女の横に並んで乗れるくらい、無邪気な気持ちになれたらいいのに。

赤味のかかった空がもう藍色に染まっていく。

もう帰らなくちゃ。

遊び足りない彼女を促して、もと来た道に戻る。気持ちだけ早足で。もたもたしてたら、いつまでも離れられなくなるんだ。

「……一緒にいてあげようか。今日だけ」

振り向いた彼女の顔は冗談みたいに真剣だった。上品な野良猫みたいな瞳が揺れてる。

「からかうなよ」

彼女のいったこと、本当だってわかった。

こんな自分勝手に少しずつ彼女を傷つけてるのも知ってるけど、引きずったままの痛みが僕を臆病にさせてる。“幸せ”を考えるには寂しさに慣れ過ぎていた。

彼女は奇術師の手つきで僕の左手の薬指からくすんだ色の指輪を抜いた。悪戯っぽく笑って見せると、それを薄闇の中に投げ捨てた。

そうやって、人が怒りそうなことを面白がってやる。だけど何をされたって不思議と腹は立たなかった。彼女になら僕は殺されたって笑ってるだろう。

「怒らないの？」

拍子抜けした声が僕を追いかけてくる。

僕の持ってる思い出を彼女はつまらないなんていわないけど、時々こうやって僕をからかう。そんなものもっていてどうするの？ って。そういわれるとそんな気がして、全部放り出したくなる。僕は意気地なしだから、いつも踏みとどまってしまうけれど。

だけど。

「いらないよ。あんなの」

今、この瞬間には。

彼女と一緒にいれば過去なんてなくても平気だ。

でも離れてしまえば寂しくて、何もない夜は過ぎ去った時代に溺れてる。触れるのが苦しくても、胸が締め付けられても。どこからが本心なのか僕にはもうわからない。

寂しいんだって泣いたら、彼女はきっと僕の涙を拭いてくれる。

だけど、そんな彼女の優しさは、彼女がたったひとつ大事そうに抱えてる孤独が作りだしてるって僕は知ってる。少しだけ分けて欲しいけど、僕の両手は捨てられないガラクタでいっぱいだ。あんな風に投げ捨ててしまえばどんなにか楽だろう。

並木道の終わりで僕らは手だけを振って、さよならはいわない。そんなこといったら、二度と会えなくなる気がして。

彼女の姿が曲がり角に消えるまで見てたら、辺りはもうすっかり夜の気配に飲まれていた。気の早い星が輝きだしている。

冷えた手をポケットに突っ込むと、固いものが指先にぶつかった。取り出してみても思わず苦笑いが零れる。彼女が投げ捨てたはずの指輪だ。僕のこと、よくわかってる。嫌になるくらい。

彼女の好きな歌がステレオから流れてる。こんな季節には悲しすぎる三拍子が、乾いたリズムで僕の傷口を撫でていた。

僕は煙草に火を点ける。涙目を煙が沁みたせいにしたくて。お願いだから、帰り道で溢れないでいてほしい。家に帰ってひとりで泣くから。得体の知れない寂しさに打ちのめされて。

通りを舞う落ち葉が彼女の軽やかな足取りを思い起こさせて、さっきまで見てたことがもう思い出になっているのを知った。

いつの日か身軽になれば、風を連れて踊ってみたい。

彼女みたいに。彼女と一緒に。

完

inspired by 公園～黄昏のワルツ/the pillows

猫と僕と教室で

ベッドから起きた僕は、ある決意と共に薄汚れた青いカーテンを開く。朝日が目に突き刺さった瞬間、昔のことを思い出した。

小学校五年の七月、不登校を始めた。

理由なんてない。強いていうなら、人間をやっているのにウンザリしたのだ。家にいても楽しいわけではない。無為に日々を過ごした。

夏休みが終わっても不登校が続くとなると、周囲は焦り出した。両親は折に触れて説教をし、しょっちゅう家にくる女の担任は「殻に籠ってちゃダメ」と繰り返す。

その内担任が放課後でもいいから顔を出せとお願いしたので、夕方になると母親は荷物みたいに僕を車に詰め込んだ。担任は教室の席で黙々と課題のプリントを埋めていく僕に、クラスで起こった事件を大袈裟な調子で話し掛けてくる。僕は一言も喋らなかった。バカだと思ったからだ。十分もすると彼女は根負けして教室から出ていく。たぶん怒っていただろう。どうでもよかった。

その日も課題を一通り消化した僕は戸締りをするために窓際に立った。校庭には居残って遊ぶ児童の影が長く伸びる。教室の一番端の窓際には一本のポプラの木がざわめいていた。窓を閉めようとする、何かが飛び込んできて、黄ばんだカーテンを揺らした。鯖虎の猫だった。

猫は僕をチラリと見てから黒板の下まで歩いていき、その下で何度かジャンプした。チョークが欲しいのだと気付いた僕は、ちびた赤色を猫の足元に転がす。彼は器用に前足で拾い上げた。そして、

——わすれもの？

と床に書いたのだ。乾涸びたミミズを釘で打ちつけたような汚い字だった。僕は無感動にそれを見つめた。感情が腐ったから、猫が字を書くことも不思議に思わなかったのだ。そして猫からチョークをとりあげ、鏡文字の『す』に大きなxを書き、正しく書き直す。

僕は自分が不登校で、放課後登校とやらをやらされているのを手短かに説明した。猫がきちんと理解したかどうかは知らないが、

——べんきよ たのしよ

と返事があった。『べんきよ』と『たのし』の後ろに、それぞれ『う』と『い』を付け足す。「勉強は嫌いじゃないよ。人と付き合うのが面倒」

猫はおし黙った。猫に人間関係なんていっても解らないに決まってる。しばらくして、猫は再び文字を書いた。

——あしたもくる？

「たぶんね」

——まてるよ

僕が『ま』と『て』の間に小さな『っ』を書き足すと、猫は満足げに窓から出ていった。だけど次の日、僕は約束を破った。その次の日も。

ようやく登校したのは冬になる直前だった。猫は死んでいた。校庭に小さな墓ができていた。

あいつは校内でも有名で、一年生の授業を外から見ているらしい。

その日から僕は不登校をやめた。

死んだ猫のぶんまで勉強しようと決意して。以来、中高とトップの成績を保ち、誰もが羨むような有名大学を出た。

そして今、就活に失敗した僕の部屋のカーテンは十年ぶりに開き、部屋の主を吐き出す。無機質なコンクリートの地面に向けて。

完

無題（お題：猫、教室、カーテン）

「無理、絶対無理！ そんな題材じゃ無理！」

「だからってカーテンレールで首吊ろうとしないで下さいよ先生！」

「食い込んでる食い込んでる、僕のか弱い喉にピンクの長い付け爪がっ」

「誰がか弱いですか」

「僕。だからさ、今回はパスの方向で」

「何がだからですか。これから代わりの作家探すの大変なんです。何とかして貰いますからね。って、聞いてます？ 暢気にお茶なんか啜ってる場合じゃないですよ！」

「げぼっ。ご無体な。ショートショートだろ？ 僕星新一みたいに頓知のきいた話かけないし。何でこんな企画の依頼受けたのよ。半年前の僕のバカ！」

「自分で自分の頭叩かないで下さい。五十がらみのジジイがみっともない」

「今この編集者、大御所作家をジジイつつた、シルクでケツを拭くかの如くサラっとジジイつつた！」

「脳味噌は中二ですけどね。それはともかく」

「悪態の上塗り！」

「猫、教室、カーテン。先生にはピッタリだと思いますけど。ねえ、ミケちゃん」

「何がにやおーん、だよ。迎合しやがって。——猫はいいけど、何よ教室とカーテンって。暗闇とかマタタビとか他に使いやすいネタあるでしょ」

「それだったら三題噺の意味がありませんよ」

「はあー。こんなことなら『サルでもできる三題噺教室』的なカルチャースクール通っとくべきだった」

「そんな事いっても始まらないです。とりあえず何か考えてください。ウチの『週間活字ガイド』は先生で持ってるんですから。お願いしますっ。この通り！」

「土下座までされたら仕方ない。こんなのはどうだろう？ 主人公は兼業作家で学校の先生。学校の仕事が忙しくて原稿を落としそうなの」

「それ、いつもの先生ですよ。先生は専業作家ですけど。仕事やってないときは何やってんですか？」

「うるさい。ずっと仕事やっててアレなの。で、担当編集者が毎日連絡寄越してくるんだよ、『まだですか？』って」

「あてつけですか」

「ひ、被害妄想だよ。主人公は焦燥の中で日々をすごすが、とうとう運命の日が来てしまう！」

「来てしまう、って、そりゃ遅筆な作家が悪いんです」

「いちいち茶々を入れるなよ。放課後の校内を見回り中、教室のカーテンが不自然に動いているのを見る。何だ？ と覗いて見ると、猫が佇んでるんだ」

「面白くなってきましたね」

「その猫がいう。『先生、原稿を受け取りに伺いました』——ぎゃああああ！」

「その話で震え上がるのは先生だけですよ」

「ちえ。単品じゃ広がらないから、繋げるてみるか。カーテンに縫い付けられた猫とか」

「いいじゃないですか、ドラマが広がりそうで」

「嫌だよ。カーテンに縫い付けるなんて猫が可哀想でしょ！ ミケ、この女に近寄っちゃダメ」

「自分でいったんでしょ。だったら、何かまともな話考えて下さいよ」

「作家と編集者が猫と教室とカーテンのネタをこねくり回す話とか？」

「よし」

「え、何、急にマジな顔しちゃって」

「それでいきましょう！」